

日本がん疫学研究会

高松宮妃研究基金学術賞の受賞

藤本伊三郎（地域がん登録全国協議会）

平成7年2月22日、財団法人高松宮癌研究基金「学術賞」を頂戴致しました。それも長年にわたって一緒に仕事をしてきました花井彩先生と共同で、受賞の栄に浴しました。望外の喜びでありました。

受賞の主題は、「地域がん登録によるがん疫学の研究」になっています。仄聞するところによりますと、この賞は、新発見ともいうべき、すぐれた成果をもたらした研究に対して、基礎、臨床の各部門で毎年1主題づつ、計2題に授与されてきたとのこと。私どものような地味な公衆衛生分野の、さらにその中の疫学研究の分野で、ひたすらに30有余年にわたってデータを積み重ねた、その研究に対して、このような重い賞を頂戴しましたことは、誠に有難く、一重に、審査にあたられました学術委員会の先生方の御配慮の賜であり、この紙面をお借りして、心から御礼を申し上げます。また、今日まで、私どもの研究に対し、御指導、御鞭撻戴きました先生方に感謝致します。

受賞当日のこと

ところで、高松宮妃癌研究基金は、戦前からがん克服に努めておられた高松宮喜久子妃殿下が、昭和28年に組織され、自ら会長をされていた「なでしこ会」を母体として、昭和43年に設立された財団法人で、現在、名誉総裁をされていると、お聞きしました。また毎年、学術賞の授与、研究助成金の贈呈、などのほか、内外の研究者を招待して、東京でがん研究シンポジウムを開催しておられます。

受賞当日、この財団を支えておられる多数の寄付者の方々と、学術委員の諸先生方とともに、妃殿下をお迎えし、理事長 和田達夫先生の御挨拶のあと、学術委員長 杉村隆先生が、平成6年度（第24回）学術賞の対象研究2題の内容について、スライドを使って説明されました。私どもの主題については、始めにがん患者の実態を把握するためにがん登録システムが必須であることを述べられ、そのあと、大阪府のがん登録

事業のしくみと、大阪府での部位別の罹患率と5年生存率との年次推移について御説明戴きました。そして最後に「このように日本のがんの実態についてお話が出来ますのも、長期にわたるこの研究のお蔭であります」と結ばれました。この御発言は、私どもにとって誠に有難く、嬉しく、感激致しました。

次に、妃殿下より、学術賞を2主題5人が、研究助成金を10人が、それぞれ戴きました。そのあと、妃殿下よりお言葉を戴き、これに対して受賞者、受領者それぞれの代表が御礼を申し上げ、式は終わりました。

そのあとのレセプションでは、参会の方一人一人に、妃殿下よりお言葉を頂戴しました。このようなレセプションは、私にとっては生れて初めての経験でしたから、非常に印象深いものでした。また、菅野晴夫先生はじめ諸先生方から、丁寧な御祝辞を戴きましたが、御礼を申上げる余裕もなく、失礼したように思います。

受賞研究の内容の紹介

以下に、大阪府がん登録資料を活用して行われたがん疫学の研究を要約しましたが、これらは、多くの研究者が参加した協同研究の成果であり、殊に(1)、(4)の分野は花井彩先生を中心として、(2)、(3)の分野は大島明、日山與彦両先生を中心として開拓されたものであることを、申しそえておきます。

主題：地域がん登録によるがん疫学の研究

- (1) 記述疫学分野：罹患率の測定にとどまらず、受療率、生存率などの推移と、生存率向上要因の研究、多重がんの疫学研究、さらには病理所見を活用した疫学研究などを、population-basedの形で、わが国で初めて実施しました。
- (2) 分析疫学分野：疫学特性の明らかな外部集団のデータファイルとがん登録ファイルとを記録照合する方式を開発し、高精度、高効率のコホート研究を可能にしました。これを多くのがんの部位に試み、発がん要因の同定と、発がんリスクの計測との研究を行いました。
- (3) がん検診の評価分野：従来、殆ど不可能視されて

おりました検診以後のがん診断例（いわゆる偽陰性例）の定量的な把握が、「受診者ファイルとがん登録ファイルとの記録照合」方式の開発によって、可能になりました。これにより、がん検診の精度管理を日常的に行いうるようになりました。

- (4) がん医療の評価分野：がん患者の臨床進行度分布、治療率、生存率などの年次推移を、性別、年齢別、医療機関別に観察して、がん医療の進歩、普及の状況の把握に努めました。
- (5) がん罹患、医療、生存、死亡の諸率の動向と、一次、二次予防活動の評価成績とを総合して、がん対策の企画と評価のための疫学手法を研究しました。

以上を要約しますと、「登録疫学」とも稱すべき分野を開きえたことになるかと、考えています。

これら諸研究の内容は、次の総説に紹介していますので、参照して下さい。

- (1) 藤本, 花井, 他: 地域がん登録の疫学的意義. 日衛誌, 543-558, 1994. (2) 藤本, 花井, 他: がん対策の評価と今後の課題—肺がん対策を例として. 癌の臨床, 39(4), 341-351, 1993. (3) 日山, 他: わが国における肝がんの急増とその対策. 癌の臨床, 41(3), 215-231, 1995. (4) 花井, 他: 難治がんの罹患の動向. 癌の臨床, 41(4), 421-436, 1995.

おわりに

このたび、はからずも受賞の栄に浴しましたが、大阪府のがん登録事業については、若い先生方が、この事業と研究とを受け継ぎ、これまでの成果をふまえて、さらに発展させて下さるよう、そして、それが、わが国のがん疫学研究の進歩にも寄与するよう、期待してやみません。また、この研究会の先生方には、地域がん登録が、がんの疫学研究に大きく寄与しうることを御理解戴き、各地域のがん登録事業に参画して下さい、お願い致します。

第53回日本癌学会見聞記

竹下達也 (大阪大学医学部環境医学教室)

第53回日本癌学会は名古屋国際会議場にて10月19日～21日に開かれた。「疫学」は口演が9題、示説が

27題で、ほぼ例年並みの出題数であった。編集責任者より印象記をまかせられたが、小生の関心が実験疫学にあるため偏った印象記になることをはじめにお断りしておきたい。相村 (浜松医大) らは、ブラジル住民の症例対照研究において、検討したいくつかの遺伝子多型の中で cyp1A1のIle-Val多型のみ肺癌との有意な相関がみられたと報告した。この多型と肺癌との関連は埼玉がんセンターの川尻、中地らがはじめて報告したものであるが、欧米では多型の頻度が低いこともあってなかなか確認されていなかった。東洋人以外で確認されたことの意義は大きいであろう。一般口演において清原ら (九大公衛) もこの多型と基本的 AHH活性との間の有意な関連を報告していた。

田中ら (九大公衛) は肝癌の最も重要な因子であるHCVの抗体価をタイプ別に測定し、肝癌群ではII型およびII+III型が多いことを報告した。一般口演でも田村 (国立呉・中国がんセ) らが、同様に肝癌群ではII型が多いことを報告していた。HCVによる発がんのメカニズムは未だにはっきりしておらず、これらの研究結果が有力な手がかりになることを期待したい。

鳴瀬、市橋 (神大皮膚科) らは、日光暴露時に日焼けするか色素沈着で黒くなるかでskin type を分類し、日焼けしやすいskin type I で皮膚癌発症率が高いと報告した。このようなタイプはどのような遺伝子によって決定されているのであろうか。紫外線による遺伝的傷害の性質は近年かなり研究されてきており、遺伝素因と環境要因との相互作用のモデルケースとして興味深い。

佐々木 (愛知医大公衛) らは北海道Y町で講演会やパンフを用いた介入を行ったところβカロテン値が2年間で有意に高くなったことを報告した。このような地道な形での無理のない「ヘルスプロモーション」が今後の疫学の展開としては重要と思われた。

さて疫学以外では、ワークショップ「高発がん家系における発がん要因の解析」において、佐々木 (京大・放生研セ) が一般的に染色体異常の起源は父親にあることが多いことを報告していたのに驚かされた。今の所その機序は不明であるが、旭川医大の美甘、上口らもヒトの精子の染色体異常頻度は極めて高いことを以前より報告している。減数分裂前後の精子と卵細胞におけるDNAの何らかの修飾様式の違いが影響しているのではないかと佐々木は考えている。

シンポジウム「がんの化学予防」は、早津 (岡山大

薬)および徳留(名市大公衆衛生)の司会により、様々ながん予防物質による化学予防の可能性が議論された。この分野は今後の疫学研究の大きな方向性を示しており興味深かった。

学会全体の流れとして、単にがんの解析に終わることなく、がんの「予防」に近づけようという指向性が強く感じられた。様々な生物学的指標を用いた実験疫学的手法が、がん予防活動の評価の上で重要な役割を果たし得るのではないかと期待している。

第5回日本疫学会雑感

玉腰暁子(名古屋大学医学部予防医学教室)

あの阪神大震災よりわずか1週間余り、日本疫学会が大阪にて開催された。新幹線は東西の連絡を失い、西方よりの参加者は参加するだけでも一大事だったと思われる。それにもまして、被災された方々のご苦労は計りしれない。さして被害のなかったとされる大阪でも、学会場の窓は割れベニヤ板で応急処置がされ、エレベーターは万が一事故があっても技師がすべて出払っているからと使用できなかった(乗っていた勇敢な先生もいらっしやったが)。などと、学会場の観察をしたり、学会でしか会えない遠方の先生方と話して気分をrefreshしていたら、深尾先生に見つかってしまい(?)この原稿書きを依頼されてしまった。

さて、本題に移るが、疫学会では例年、循環器疾患とがんがバランスよくミックスされている。今年より決まった奨励賞の受賞者3名による受賞講演でも、また5名によるシンポジウム(循環器疾患・がんに関連する生活環境因子とそのコントロール)でも、一般口演でもその伝統は変わっていなかった。一般口演で、セッションとしてとりあげられたのは、肝がん(C型肝炎)のみであり、現在がんの疫学でもっとも問題になっている分野なのであろう。主な発表形式である示説では、直接がんに関連するセッションとして、胃ガン・肺ガン、ガン・Case-Control Study、ガン登録と動向が設けられていた。示説には討論時間が設定されており、深いディスカッションができそうなものだが、実際には8ヶ所に別れてしまうため、自分の発表演題の近くのものにしか接することはできなかった(がんに関連する発表をとりあげてここで報告できない

理由...)。休憩時間中に回ることはできたが、発表者も他の発表を見に回ったりしているので、なかなか質疑応答までは進まないのが、現状であったと思う。次年度は、示説をなくしてすべて口演という計画を聞いており、どのようなものになるか楽しみである。

それにしても2か月経った現在も被災地では不自由な生活が続いているのだらうと、何もできない自分が情けない。一体疫学者はこんなとき何の役に立つのだろう。疫学が流行病の予防をもともと目指したものだとする、避難所などでの感染症発生予防に役立ってもよいはずなのに…(おそらく現在の日本では、慢性疾患予防が重要になっているから?)各種疾患の流行が予想されるところで、臨床医が望まれても、疫学者が必要とされないのも皮肉なものだ(もっとも患者をみろといわれたら、ちょっと困る…)。

最後になりましたが、大変な状況の中、事務局である大阪成人病センターの方々、お疲れさまでした。また、亡くなられた日山先生のご冥福をお祈りして、この稿を終えたいと思います。

第9回比叡山シンポジウム

「がん増殖の抑制と食品の関連」について
渡辺能行(京都府立医科大学公衆衛生学教室)

平成7年2月25日(土)・26日(日)の二日間にわたって京都市左京区の比叡山山頂近くにある比叡山観光ホテルにおいて、約50名の参加をえて「がん増殖の抑制と食品の関連」という話題についての第9回比叡山シンポジウムを京都府立医科大学公衆衛生学教室で開催させていただきましたので、少し報告させていただきます。

私どもは昭和50年より隔年で比叡山シンポジウムを主催してまいりました。過去には「粘膜防御機構」、「細胞の分化」等の消化器病学の基礎的分野から、「ストレス研究の新しい展開」のように基礎医学と社会医学の接点となるテーマ、さらには「医療経済の新しい展開」のように社会医学のテーマについて、全国の研究者の方々の中から発表と討論をお願いしてきました。昨年もほぼ同時期に同じテーマで開催しており、今回再度開催する運びとなったものです。

このシンポジウムでは、基礎医学の分野からは埼玉

県がんセンター研究所の藤木博太先生による「緑茶によるがん予防」、柴田天然薬物研究所の柴田承二先生による「生薬成分を起源とする発がん予防物質」、国立がんセンター研究所の西野輔翼先生による「食品成分による発がん予防」について、がん疫学の分野からは愛知県がんセンター研究所の田島和雄先生による「モンゴロイドの病気と南米への移動」、国立がんセンター研究所の渡辺昌先生による「がん予防を考える」についての合計5題の基調講演と両分野17題の一般講演の発表がありました。

この中で特に注目された点はわが国で日常習慣となっている「お茶」に関する研究でした。お茶の中に含まれている(-)-epigallocatechin gallate (EGCG)は、IARCのgroup2の発がん物質でありながら、“がん予防物質”でもあることが最近10年間の厚生省研究班の研究とこれに注目したアメリカの研究で明らかにされてきているということで、New York Timesではgreen tea extract のがん予防効果について3ページにもわたる特集が既に出ているということでした。埼玉県がんセンター研究所の中地敬先生がコホート研究でお茶のがんの発症年齢を遅らせる効果があるというクリアなデータを示されました。渡辺昌先生の基調講演の中での指摘にもありましたが、がん予防にとってはヒトの寿命の中で発がんへの各段階を昇っていく年齢をいかに高齢側へずらしていくのが重要であり、お茶にそのような可能性があることから、わが国においてさらにお茶についての疫学研究がなされていく必要があることを強く感じました。

また、 β -カロチンに関連した発表も5題あり、昨年4月に発表された β -カロチンを大量投与するとかえって肺がん等の発生が増加するという介入研究の結果についての論議もありました。すなわち、個々のカロテノイドの作用を評価することが妥当なのか、カロテノイド間の相互作用も含めた総合的な作用として評価すべきなのかという問題、他の抗酸化能を示す物質との相互作用に関する問題、さらに、大量摂取したときにカロテノイドそのものが過酸化物となる可能性などが今後の課題とされました。

なお、このシンポジウムの詳細につきましては平成7年度末に小冊子としてまとめることを予定しておりますので参照していただければ幸いに存じます。

Second International Conference on Dietary Assessment Methods に参加して

坪野吉孝

(国立がんセンター研究所支所臨床疫学研究部)

1月23-24日に米国ボストンで行われた、Second International Conference on Dietary Assessment Methods に参加してきました。名前の示すとおり、これは食事調査の方法論の問題に関する国際会議であり、第1回は1992年にMinnesota大学で開催されています。第2回にあたる今回の会議は、Harvard大学のDr. Walter C. Willettらの主催で行われ、各国から600人程の参加がありました。日本からは、東京大学の丸井英二先生、国立健康・栄養研究所の松村康弘先生、それに私の三人が参加しました。

2日間の会議では、11のシンポジウムに加えて、200ほどの一般演題の報告がありました。全体的な議論の焦点は、やはりFood frequency questionnaire (FFQ)の妥当性に関する問題でした。1985年にWillettらが開発したFFQは、数十項目の食品の摂取頻度を自記式で回答するという簡便な質問票であるにもかかわらず、各種の栄養素の摂取量をかなりの精度で推定することが可能であり、米国の看護婦や男性医療職に彼らのFFQを使用したコホート研究からは、栄養とがんに関する新知見が今日続々と報告されています。今回のシンポジウムでも、FFQの妥当性評価における統計的手法の役割、総エネルギー摂取量の補正に関する問題、摂取量の指標としてのbiomarkerの意義、FFQに回答する際の認知心理学的問題、さらに小児、高齢者やマイノリティー集団を対象とする新しい質問票の開発などがテーマに取り上げられ議論されました。

参加者には、現在世界中で行われている食事調査法の妥当性研究(validation study)をまとめた報告が配付されました。この報告によれば、世界各地で84の研究が進行中であり、FFQの妥当性に関する研究が全体の60%を占めています。Willettらが開発したFFQや妥当性研究の方法がこの10年間で世界中に広がり、栄養と健康について調査する際の標準的な方法論として確立しつつある状況が感じられ、非常に印象的でした。逆に言えば、自分たちが使う質問票の再現性や妥当性を定量的に評価しておかなければ、どんなに多人数のコホートを長期間追跡したところで、研究の結果を国際的に認知してもらうことは今後次第に困難になるだら

うという危機感を強く覚えました。現在日本でも、FRQを開発し妥当性を評価する研究がいくつか進行中です。これらの研究によって10年おくれの状況から早急に脱却し、世界的な研究の発展に参加してゆかなければならないと思いました。第3回の会議は、1998年にオランダのアムステルダムで開催される予定です。この時には、日本から出席する研究者で飛行機が一杯になることを夢見ています。

第3回日本がん検診・診断学会 開催のご案内

このたび第3回日本がん検診・診断学会を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

会 長：渡邊 決（京都府立医科大学泌尿器科）
会 期：1995年12月15日（金）9:00～17:00
会 場：国立京都国際会館
（京都市左京区宝ヶ池 TEL:075-791-3111）

特別講演、シンポジウム、一般演題（公募）などを予定しております。

一般演題応募締め切り：1995年9月15日

事務局：〒602 京都市上京区河原町通広小路上ル
京都府立医科大学泌尿器科学教室内
第3回日本がん検診・診断学会事務局
担当：斎藤雅人、内田 睦
TEL:075-251-5595, FAX:075-251-5598

Invitation

The International Conference on Food Factors: Chemistry and Cancer Prevention will be held at Act City Hamamatsu, Hamamatsu, Shizuoka Prefecture, Japan, on December 10-15, 1995. The organizing Committee takes pleasure in inviting you to participate in the conference. The conference will focus on most important and exciting research of food factors, and of its organization, which will prevent the cancer.

Chairman : T. Osawa

Honorary Board : T. Hoshi Y. Ishikawa N. Ito
H. Kobayashi K. Koshimizu Y. Kuroda
M. Namiki S. Shibata M. Terada

Organizing Committee :

S. Arai H. Fujiki H. Hayatsu M. Hirose
K. Kanazawa H. Kasai K. Kawai S. Kawakishi
N. Kinai T. Konoshima H. Maeda H. Miyakawa
T. Miyazawa H. Mori T. Nakayama H. Nishino
H. Ochi I. Oguni H. Ohigashi T. Okuda M. Otsuka
R. Rathnam K. Sakata K. Shinohara J. Terao I. Tomita
S. Watanabe M. Yamaguchi T. Yoshikawa

Scientific Program :

1) Approaches to Cancer Prevention

(1) Epidemiology (2) Mechanism

2) Phytochemicals

(1) Fruits (2) Vegetables
(3) Teas (4) Spices and Herbs
(5) Cereals and Beans (6) Marine Products
(7) Processed Foods (8) Others

3) Diet and Diseases

(1) Vitamin C (2) Vitamin E
(3) Carotenoids (4) Flavonoids
(5) Minerals (6) Lipids
(7) Dietary Fibers (8) Others

Official Language : English

Social Events :

Banquet, excursion and accompanying persons' programs will be planned Technical Exhibition : December 11-17, 1995 Over 150 booths, featuring foods for 21st century, natural food additives (food colors, flavors, antioxidants) and natural extracts

Registration fee : ¥40,000 (Before August 31, 1995)

¥50,000 (After September 1, 1995)

Correspondence :

ICoFF Secretariat Japan Institute for the Control of Aging 723-1, Haruoka, Fukuroi, Shizuoka 437-01, JAPAN Tel: +81-538-49-0125 Fax: +81-538-49-1267

Satellite Symposium : In conjunction with the ICoFF, a satellite symposium on "Free Radical Scavengers in Food and Biological Systems" will be held in Honolulu, Hawaii from December 17-22, 1995. For details, contact the symposium chairman, Dr. T. Osawa at the above address. Plan now to attend ICoFF in 1995, in Japan.

第18回日本がん疫学研究会御案内

日時：1995年6月2日（金）9：00～17：30

会場：広島医師会館
〒733 広島市西区観音本町1-1-1
TEL. 082-232-7211

会長：馬淵清彦（放射線影響研究所、疫学部長）

主題：がんのリスク評価

プログラム

9：00-9：30 受付
9：30-9：40 開会挨拶
重松逸造（放射線影響研究所）
9：40-9：50 はじめに
馬淵清彦（放射線影響研究所）

セッション1 座長 吉村健清（産業医科大学）
9：50-10：50
1. 放射線とがんのリスク評価
デール・プレストン（放射線影響研究所）

10：50-11：00 休憩

11：00-12：00
2. タバコとがんのリスク評価
秋葉澄伯（鹿児島大学）

12：00-13：00 昼食

13：00-13：30 総会

セッション2 座長 渡辺 昌
（国立がんセンター研究所）

13：30-14：15

1. 肝がん 津熊秀明
（大阪府立成人病センター）

14：15-15：00

2. 乳がん 浜島信之（愛知県がんセンター）

15：00-15：15 休憩

15：15-17：25

パネル・ディスカッション：がん予防における
リスク評価の役割-現状と展望
座長 久道 茂（東北大学）

パネリスト

松原純子 - リスク・アセスメント
（横浜市立大学）

高原亮治 - Decision maker から
（厚生省生活衛生局食品保健課）

岡本浩一 - リスク認知と受容
（東洋英和女学院大学）

草間朋子 - 放射線リスク（東京大学）

山内雅弥 - マス・メディアから
（中国新聞社）

大島 明 - がん予防・疫学
（大阪がん予防検診センター）

17：25-17：30 閉会挨拶 馬淵清彦

18：00- 懇親会 会場：広島医師会館

東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西東西

東西編集後記

この度、急なことでしたが、このニュースキャストのお世話をしようにとのことでしたので、どれほど役にたつかわかりませんが、引き受けさせていただくこととしました。深尾先生の足をひっぱらないようにしたいと思いますので、よろしくお申し上げます。（京都府立医科大学公衆衛生学 渡辺能行）

田島先生の甘いお誘いに乗って編集委員長をお引き受けして1年が経ちました。予定は4回位出すつもりでしたが、結局はこれが3号目です（正確に言えば、2号目は日山先生の追悼特別号でしたのでフルに働いたのは2.5位?）。東西コンビは、西方は日山先生にかわって、渡辺先生にお願いすることにしました。あと1年(?) よろしくお祈りします。（東北大学医学部公衆衛生学教室 深尾 彰）

発行
日本がん疫学研究会

事務局 〒464 名古屋市中種区麴子殿1-1
愛知県がんセンター研究所疫学部 気付
TEL: 052-762-6111 FAX: 052-763-5233
振込口座 名古屋1-37001

編集責任者
深尾 彰
渡辺能行